

優秀修士論文概要

戦争文学としての J. D. サリンジャー作品

川 島 広 大

本修士論文は、作家 J・D・サリンジャー (J. D. Salinger) の戦争体験を踏まえて、キャリア初期の代表作 *The Catcher in the Rye* (1951) と *Nine Stories* (1953) を論じるものである。近年、作家の第二次世界大戦における過酷な従軍体験を詳述した伝記が複数出版されるようになり、作品も今までと異なる社会的な観点から再検討されるようになった。ところが、今日の外在的な読解アプローチは謎に包まれてきた作家像の脱神秘化に成功する一方で、古典的なテキスト中心主義の研究の成果と矛盾するものも少なくないのが現状である。そこで本論文では、最新の伝記研究を批判的に参照することで、サリンジャー研究における作家の戦争体験と作品の宗教・神秘性というジレンマの解決を試みる。

序章では、*Catcher* 論を例に、伝記研究以後の先行研究の問題点を検討した。たとえば今日的な研究は、弟の喪失のようなトラウマの出来事から主人公ホールデンの激情を説明し、主人公が夢想する “catcher in the rye” というモチーフの社会的・歴史的な価値に力点を置く傾向がある。一方、伝統的な研究はむしろ、メリーゴーラウンドに乗る妹を眺める場面子どもを “catch” することの価値を自ら否定するホールデンが “catcher in the rye” になるという夢を諦める結末 (211) のアイロニーこそが重要だと考えてきた。*Catcher* にまつわる文化史を論じる研究者は、この点を根拠に同書を暴力を肯定する書物とみなして、現実に暴力的な行動に出たマーク・チャップマンのような読者は「不誠実な読者」だと断言するほどである (Whitfield 572)。だが問題は、テキストを精読し、象徴性や両義的なテーマを読み込むほど、作家や作品を必要以上に神秘化してしまうことにある。

そこで第1章では、書き手としてのサリンジャー像を脱神秘化するために、最新の伝記研究の成果を踏まえて、伝記・歴史的トピックと関連づけながら自伝的作品を読む。エバーハート・アルセンによる最新の伝記 *J. D. Salinger and the Nazis* (2018) は、戦後 PTSD を患ったサリンジャーが戦中、諜報隊員としてナチスを逮捕し、ユダヤ人強制収容所の解放の役目を担ったという衝撃的な事実を明らかにした。この際、アルセンが主張するように、戦後の作家が *Catcher* や *Nine Stories* 収録の代表短編の一つ “For Esmé—With Love and Squalor” 等の作品内で、ナチス (党員) に対して頑ななまでに “nonjudgmental” (129) な態度を貫いたことは大きな謎である。第2・3節では、元諜報隊員で作家の語り手が戦時の記憶を物語る自伝的な物語 “For Esmé” で、ナチス党員に対して『カラマーゾフの兄弟』の一節が引用される点に注目し、作品全体の解釈に影響を及ぼすキリスト教的な「愛」の論理について考察を行った。第4節では、ユダヤ性およびホロコーストが祖上に載る数少ない「社会的」な作品 “Down at the Dinghy” の分析を通じて、子どものイノセンスという性質の作家にとっての重要性から作家の言語観へと論を進める。第5節では、同時代の「新批評家」から評価が高かった “Pretty Mouth and Green My Eyes” を扱い、主要人物である退役軍人の語られ方から、*Catcher* とは対照的に、*Nine Stories* 作品ではそもそも作家自身の思想や語り手による価値判断が積極的に差し控えられていることを論

じる。

第2章では、第1章の議論を土台に *Catcher* の読解を行った。まず第1節では、戦前に書かれた先行作品を参照し、*Catcher* における人種言説の忌避を概観する。第2節では、「つかまえる」という行為と物語全体の結びつきを確認する。ケネス・スラウエンスキーも指摘するように、「つかまえる」という本作のキー・ワードは、弟の死を経験し、死者へ強いオブセッションを抱いていたホールデンが “If a body meet a body coming thro’ the rye” というロバート・バーンズの詩の “meet” を “catch” と「誤って引用した」(327) 言葉だった。第3節では、「聞き違い」の結果としてのこの関わり方を、原詩のような他の人間 (body) に対してではなくて、他の身体 (body) に対する関わり方と捉え、「命を救う」という高潔な行為にも「殺す」という暴力的な行為にも転ずる可能性を秘めた危うさを明るみに出す。第4節では「出会う」という正反対の行為から、物語を読み直す。15章でカトリックの修道女と会話をした後、宗派を問われる恐れを感じたと語る場面 (112) に典型的だが、実のところ、相手の持ち物や振る舞いに注意を凝らし、他者の正体を問おうとするのは、ホールデン自身だということは重要である。「出会う」という行為はもとより、そうした詮索を通じて相手や自分自身が何者であるかを問題とする関わり方ではない。最終章でようやく、妹との交流のなかで「つかまえる」関わり方は手放されることになる。第5節では、語るホールデンが最終章で嫌っていた人物を含めてあらゆる人のことを「懐かしく／恋しく思う」(miss) と語る点に注目し、バーンズの詩と同じく “body” と表記される死者への感情が、最終的に生きた人間へと向けられる点を「許し」として評価する。

第3章では、第1章で取り上げなかった *Nine Stories* 作品において、*Catcher* と通ずる問題系が、異なるスタイルで描かれている点に注目している。以下の読みからは、しばしば指摘されるような神秘主義への傾倒よりか、感情の機微を描くことに長けたリアリズム作家としての技巧が見てとれる。たとえば、第2節で扱う “Uncle Wiggily in Connecticut” の主人公は、ホールデンと同じく生者への嫌悪感を抱いて生きる人物だが、ここでは彼女の悲壮感はさらなる被害者である娘やメイドの描写で相対化させられる。あるいは、第3節で扱う “Just Before the War with the Eskimos” では、*Catcher* の結末のようなエピファニーが、自意識的な少女のありふれた日常における些細な心境の変化として描かれていた。第4節では、二つの作品におけるいずれも独特な一人称語りを論じた。“The Laughing Man” では “madman” と自嘲するホールデンとは異なる、物語当時の自己に同化するような視点が採用され、「信頼できない語り手」が作中物語の聴き手でもある少年期の無垢な視点を保持しようとする。その点、一般に宗教への言及が注目されてきた “De Daumier-Smith’ Blue Period” は、*Catcher* と同様、近親者の死に起因する数々の問題が自嘲的な語り（そして宗教への過剰な言及）のきっかけとなっていることが指摘できる物語である。第5節で論じる “A Perfect Day for Bananafish” と “Teddy” は神秘主義的な読みを誘ってきた作品だが、自死する人物の理解不可能性（シーモア）や唯識論的な立場（テディ）を通して、作家が自らの問題系の相対化を試みる実験的な二作品とみなすことができる。

結論では各章で行った議論を総括する。ユダヤ系アメリカ人としてナチスを逮捕し続け、ホロコーストに立ち会った最初の一人であるサリンジャーの戦争は、直接的な題材となるよりか創作活動の根幹に影響を与えた。社会的な文学を歓迎しなかった同時代の新批評的文学観との関連についてはさらなる研究が必要だが、ともあれ “For Esmé” でナチスとの関係性に「愛」という論理を持ち込んだ元諷報隊員の作家サリンジャーは、一般の読者とも無関係ではない物語として戦争を、彼なりの形で語ることを選択したのだと言える。

戦争文学としての J. D. サリンジャー作品

引用文献

- Alsen, Eberhard. *J. D. Salinger and the Nazis*. U of Wisconsin P, 2018.
- Salinger, J. D. *The Catcher in the Rye*. Little, Brown, and Company, 1991.
- . *Nine Stories*. Little, Brown, and Company, 2014.
- Whitfield, Stephen, J. “Cherished and Cursed: Toward a Social History of *The Catcher in the Rye*.” *The New England Quarterly*, vol. 70, no. 4, December 1997, pp. 567-600.
- スラウエンスキー、ケネス 『サリンジャー 生涯91年の真実』 田中啓史訳、晶文社、2013年。